第 13 回「全国日本語俳句コンテスト」選評

鳥羽田重直 先生

総評 ：

通算 13 回目となる今回の日本語俳句コンテストは、一時中断の時期があり、一昨年再開されて今年 3 年目となります。今回もまたたくさんの作品が寄せられました。これは、台湾の若い人たちの間には世界で最も短い日本固有の文学である俳句に関心をもっている人が大勢いること示しているもので、たいへん喜ばしいことです。

俳句は、言うまでもなく①５７５の１７音であること、②季語を一つ入れることが条件です。このことを踏まえて感じたことを以下に述べたいと思います。

今回の題詠は、「ぶらんこ」「蜻蛉」「甘蔗」などで、これ自体が季語（「季題」ともいう）であることをまず認識することが大切です。これらの中のいずれか一つの季語を用いれば、ほかに季語を入れる必要がないのですが、一句の中にさらに別の季語が入っている季重なりの作品が少なからずありました。

一方、雑詠の方は季語の指定がないので、俳句を作る時にまずどういう季語を使って俳句を作るかを自分で考えなければなりません。その分作りにくかったようで応募数も題詠よりは少なかったようです。雑詠には季重なりの句が題詠よりも多くありました。さらに季語の入っていない無季の句が結構ありました。季語を知るには歳時記が必須です。

さらに今回一つ気になったことを記します。俳句には「切字」というものがあります。その代表的なものが「や」と「かな」と「けり」です。これらは一句の中に一つしか使えないのですが、複数入っているのがあったことです。

（題詠の「蜻蛉や水面の光よぎりけり」、「ぶらんこやおさない頃の記憶かな」）これは絶対避けなければなりません。ただし、中村草田男に「降る雪や明治は遠くなりにけり」というよく知られた句がありますが、これは例外中の例外です。

もう一つ付け加えるならば、俳句は韻文なので調べが大事です。松尾芭蕉が「句調（ととの）はずんば舌頭（ぜっとう）に千転せよ」と言っているように、出来上がった作品は何度もくりかえし声に出して読み、言葉の調べが整うまで推敲を重ねることが必要です。みなさんも今回応募した自分の作品を声に出してくりかえし読んで、句の調べがどうかを考えてみてください。今後俳句を作る時には、ぜひこの芭蕉の言葉を思い出して実践してください。

最後に今回の経験を今回限りのものとせず、これからも俳句に興味、関心をもち、俳句を作り続けていってください。

台湾には、1970 年に結成された 50 有余年の歴史をもつ「台北俳句会」があります。毎月第二日曜日に台北市内の国王飯店で句会が開かれていますので、機会を見つけて句会を見学してみるのも良いのではないかと思います。